学習のポイントの解答例

1　月を見て遠く離れた人や場所を思う文学作品にはどのようなものがあるか、調べてみよう。

【答】この単元で学んだ李白「静夜思」が代表例となろう。また「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」（阿倍仲麻呂）も百人一首に採られてよく知られている。

▼ポイント▲　百人一首から月の出てくる歌を取り上げさせて、この問いに当てはまるかどうかを考えさせてもよい。漢詩や和歌などの伝統的な文学作品に限定せず、生徒に馴染みのあるラノベやアニメ、ゲーム、映画、ドラマのシーンなどを広く自由に紹介させてもよい。

また、コロナ禍の中で中国武漢に送られて救援物資の箱に記されて有名になった「山川異〻域、風月同〻天（山川　域を異にすれども、風月は天を同じうす）」という長屋王の句（出典は鑑真の伝記「唐大和上東征伝」）も、月がなぜ離れた土地や人を結ぶ媒介となるのかを示す例となろう。

2　漢詩（漢文）と和歌（古文）で、月の描かれ方や作品の背景にどのような共通点と相違点があるか、五六ページ「単元の言語活動3」も参考にして、比較してみよう。

【答】月が漢詩でも和歌でも好んで描かれることは共通するが、漢詩がおもに夜の満月を描くのに対して、和歌は満ち欠けそれぞれや明け方の月など、描写が細かいのが特徴である。また、月を見て何らかの感情を催したり涙を流したりすることも共通して見られるが、漢詩では、左遷や離郷など、中国の士大夫の生活を背景としているものが多いのに対して、和歌では、夫婦や恋人の情を背景にしたものが多い。

▼ポイント▲　「解説」でも説明したように、月に対する見方、作者の社会生活、両国の地理感覚と自然環境の違いなどに目を向ける。日本人だからこう、中国人だからこう、という感覚的な先入観から距離を取り、それぞれの文学作品が、誰によってどのように作られ、誰にどのように享受されたかということをふまえさせた上で、それぞれの表現が成立する条件を一つ一つ認識させることが重要である。また、日本でも漢詩は作られ、和と漢の二つの表現手段が選択可能であったために、漢詩文と和歌（仮名文学）では役割分担が自ずと行われたことも、余裕があれば説明しておきたい。

（齋藤　希史）